



日本盆栽作家協会会報

第23号

平成27年10月1日



盆栽は作家なくして作品なし 作品なくして芸術なし

盆栽は、十年手元に持つと、真に自分の「作品」となります。十年といわないまでも、最低でも五年は手元に持つて自分の「作品」として愛情をかけて欲しい。

それくらい心の余裕が無くては、楽しさがわいてこないし、心の眼も、真の審美眼も開けません。

そして、作家としての目的意識を持ち、個性的な作意と創意で作る。そこで初めて芸術たりうるものが誕生するのです。

日本盆栽作家協会は、盆栽界の発展のために真の盆栽の「作家」を育てていきたいと考えています。

第23回作家展

会期／前期 平成26年10月17日(金) ～ 10月22日(水)
後期 平成26年10月24日(金) ～ 10月29日(水)
会場／さいたま市大宮盆栽美術館
主催／日本盆栽作家協会



梔子(クチナシ) 鉢：海鼠外縁長方
山田登美男(埼玉県)

クチナシの名前の由来は、果実が烈開しないことから「口無し」といわれてきたことです。これからは日一日と紅色となり、美しい宝石のように輝いてくることでしょう。この梔子の盆栽は、昔から有名な盆栽として大切に培養に努めてきました。初夏に5弁で咲く真白い花も蝶が舞うように印象的に心に残ります。



第23回作家展(作品の説明をする山田会長)



真 柏 鉢：紫泥外縁輪花式 福館 治（岩手県）

大きくねじれた、白骨化した枝（ジン）を引き立てる為、昨年、枝葉を半分の量にしました。古色感を表現したくて、極力、葉を透かし、枝の線が見える様に作出してみました。



梅もどき 鉢：緑寿庵 加藤 寿（千葉県）

隆起した根元から力強く立ち上がった幹模様が大樹のような趣をたたえている本作は、私が20年以上にわたって作っているものです。今年は深紅の華麗な果実がたくさん実を結び、今回の出品に至りました。この時季ならではの彩りをお楽しみください。



長寿梅

鉢：朱泥袋式楕円

今井 千春（神奈川県）

この長寿梅は、7年前に入手しました。以後小枝作りに専念し、現在に至ります。時間の経過とともに小枝も古さを増してきたので、鉢合せにも配慮し、朱泥袋式楕円に合せ、古相感を表現してみました。

赤 松

鉢：紫泥輪花

山田登美男（埼玉県）

秋の静かな景色に調和した古木な赤松の文人木は、私の作風の一つのテーマであり新作です。本樹には、旅人が一休みしたい、そんな野趣な味わいを感じることができるでしょう。根元に個性的な芸があり、サバ幹の厳しさが孤高な佇まいを見せている作品です。





檜（ひのき） 鉢：南蛮丸 米沢 増雄（東京都）

大変に鉢持ち込みの古い盆栽であり、先ず主木が力強くしっかりとして理想的な寄せ植枝法である。最近、檜の盆栽展示が数少ない中、日本の原風景を感じさせる秋の山里の姿であろう。



五葉松（銘：吾妻錦） 鉢：行山輪花 阿部 健一（福島県）

樹齢、実生 86 年、盆養歴 55 年。最初の正面は、現在の左側面でしたが、23 年前に先代より引き継いだ後、後側に位置していた 2 本の幹のうちの小さい方の幹の存在をより強く表現してやりたいと思い、右側面を現在の正面に作り変えてみました。



花梨

鉢：中国鉢新渡瑠璃長方隅切
野上 寿明（富山県）

25 年ほど前にまだ手入れのされていない原木を譲り受け、今日までできるだけ切りつめながら作りこみ、現在の姿になりました。

赤松

鉢：南蛮丸
矢内 信幸（大阪府）

赤松がこれほどに力強く踊る姿の盆栽は珍しい。山水の芸術といわれる盆栽ならではの見せ場を作ってくれている。松の持つ生命力、活力などを表現して独特な枯淡な味わいを覚える。





竹の盆栽の床飾り

盆栽のある空間・床の間について

生命のある盆栽を飾るということは、その部屋に入った瞬間は大変に精神的な緊張を感じて、やがて緊張の限界を超えますと感動に変わります。裸になったような感じになります。そしてリラックスした気分が訪れ、部屋の壁が突き抜けて自然の中に気持ち広がりが一体感が生まれます。

そんな自分が盆栽を見ていると同時に、盆栽が自分を見ている。つまり自然が一体化して宇宙が一つのもので感じられる。言い換えれば、盆栽と対話していることとなります。

例えば、床の間に花ものを飾る時、一輪もしくは二、三輪のときに、それも未だ咲ききらない蕾の状態を飾ることによって、無限の可能性が秘

日本文化を表現したひじょうに短い形として、盆栽と和歌・俳句というものがあります。

春は花 夏はほととぎす 秋は月
冬雪さえて すすしかりけり

道元禅師（1200～1253）は、鎌倉時代初期の人で、中国から日本に初めて禅宗を伝え、日本の禅を確立した人です。この和歌は禅師のもので、当たり前の自然の風景を歌っている。

つまり、春は花が咲き、夏は木陰で鳥が鳴く、秋は月がひじょうに美しい、冬は雪が冷たく清らかである。この誰にでもわかる当たり前のことを当たり前として受け取るということ。そこに自然と人間が一体になった世界があるということです。つまり雪月花の世界に通じます。

同じように、感動の極地、至高の体験を詠んだ俳句で江戸時代の日本

子どもらと 毛毬つきつつ この里に
遊ぶ春日に 暮れずともよし

日本の美的姿勢と「遊び」について

それは物質的な貧しさの中にこそ真の心の豊かさを味わえる。人間の力で作り出したものよりも、自然そのものの力が感じられるものを大切にすることである。

「遊び」には二面性がある。（行動をする意味と行動を起こさない意味）。

なぜこうした二面性が生まれるのだろうか。例えば「わび・さび」というと非常に静かだが、実際には狂気に至るような激しさがある。

わび茶の奥義を象徴している「枯れかじけて寒かれ」という言葉にしても本当に真冬の枯れ枝のようなものの中に、激しい生命を宿している。盆栽人であれば、時々感じることもある。

の最も偉大な俳人である松尾芭蕉が、松島という美しい小島を詠んだ俳句です。

松島や ああ松島や 松島や

自然と一致した最高の境地は、ここにあると評価しています。

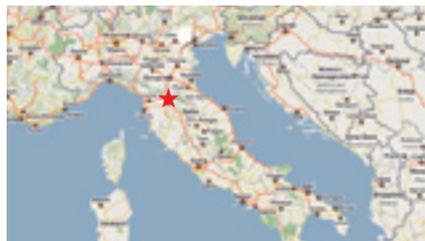
又、道元の和歌の影響下に作られているといわれます良寛の和歌に（再晩年）

形見とて 何か残さん 春は花
山ほととぎす 秋はもみじ葉

自分が死んだ後も、自然はそのまま四季を繰り返している。その自然の中に自分の生涯も抱かれている。そのような絶対的な真理として、自然をとらえる。それを残る人々が私から学んでほしいといっている。

又、有名な歌に

められて尊いのです。



(日本盆栽作家協会講師)
吹田 勇雄

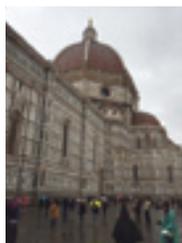


Sakka-Ten 2014

—秋の木々—



左・下 デモンストレーション風景



フィレンツェ石作りの建物



床の間飾りの勉強会も開催



今回参加したメンバーの皆さん達。中央が私。右に会長のロレンソ氏。イタリア、フランス、スペイン、ドイツ、スイス、オーストリアの6ヶ国から参加してくれました。

イタリアで開催された国際盆栽展「作家展2014 秋の木々」に講師として招かれ、11月5日に成田を出発し、翌6日は雨の中フィレンツェ市内を観光しました。町の中心部に有る（通称ドーム）石作りの建物は特に圧巻の一言です。千年前の建物も修復しながら今だに使われていて、古い物はローマ時代二千年前の建物も残っています。古代ローマ人の凄すごさに驚きました。町の至るところに教会が有り、日曜日にはミサが行われ、クリスマスチャン教会を訪れています。

7日は、フィレンツェ県フィエゾレにて、作家展がスタート。古い教会が有る広場の前では売店もあり、お祭り気分が始まりました。午後からは、ワークショップが有り10人が思いの盆栽を持参してデモンストレーションしていました。私も自前の作業衣に着替えて一人一人作業の手伝い、参加した人の盆栽を全て完成させて3時間が、あっと言う間で完了。イタリア中部地区での開催は初めてと言う事もある、沢山の人が見学に訪れていました。

8日は、午前中、スイスのニコラ氏とスペインのサビエル氏がデモンストレーションを行いました。午後からは私のデモンストレーションで、通訳のトリニ先生、アシスタントのデイエゴ君と私の弟子のバレンティン君に手伝ってもらい、イタリアの山取りピノ・ムゴ松の改作に挑みました。山の味を活かす様に、枝の簡略化を図り大胆な改作に、参加者から大変な好評をいただきました。



(日本盆栽作家協会常任幹事)
小林 國雄



アジア太平洋地域盆栽大会 2015

2015年6月4日の夕方、成田を出発してベトナムのホーチミン市に向かう。その日は空港近くのホテルに泊まり、次の日「ABFFアジア太平洋地域盆栽大会2015」の開会式が市内のリンリンパークで行われた。ベトナムの国旗の次に日本の国旗が入場して来たのに日本人の参加者はわずか5名しかいなかったが、各国からは、三千名ぐらゐもの参加者がいて大変

なにぎわいであった。デモンストレーションは、各国から選ばれた12名で同時に行われました。40度近い高温なので体中から汗が流れ出てみんさん大変そうでした。仕事が終わわり、夜のパーティや食事も美味しく観光もとても楽しかった。二年後に日本で世界大会が開催されるのに、たった5名の参加者では何か不安が感じられてしかたがなかった。



デモンストレーション風景 (左：筆者)



リンリンパーク



「アジア太平洋地域盆栽大会 (Asia-Pacific Bonsai Friendship Federation 2015 = ABFF 2015) 開会式



デモンストレーション会場全景



盆栽展示風景



台湾の著名な盆栽大師 梁悦美氏と



お客様に サインする筆者と吹田講師



花博公園



吹田氏とデモンストレーション

2014年は海外の講演依頼が多く、4月のブラジルに始まり、中国、スウェーデン、インドネシア、台湾と毎月のように海外でのデモンストレーションとワーク

ショップを行った。中でも驚かされたのは、台湾での展示品の素晴らしさと、私と吹田君のデモの見学者が千人以上もいたことである。(小林國雄) (撮影 SJKen)

「華風 第19回全国盆栽展」
2014年 11月15日～23日
台湾・台北市 花博公園



第23回作家展 続き

黒松
鉢：和外縁隅切長方
小林 國雄（東京都）
表裏を逆転して、右に落ちた太い枝を個性にして、前正面のサバ幹の欠点を隠し右流れの躍動感ある樹形にしてみました。



日本盆栽作家協会 アジア交流記



余姚市の私立の園芸校の高風中学校の大きなグラウンドに大型の盆栽が衝立をバックに両面に飾られ、それらが校庭を一周していた。空には赤いアドバルーンが上がり、日本では考えられない景色であった。また体育館の中には水石が沢山飾ってあった。どちらかと言えば、美石、珍石、奇石、怪石のような石が多く陳列されていた。私と吹田君は黒松の改作、須藤さんは景道の講義を行った。（小林國雄）

中国盆景收藏家藏品国家大展

2014年10月31日
於 中国・余姚市

お知らせ

「国際盆栽シンポジウム」開催!!

当作家協会は、盆栽のステータスシンボルとしての位置づけと、社会的に高品位なブランド盆栽を確立する為、作家の高揚を図ることとは不可欠であると考えており、その目的に向かって今回のシンポジウムに参画します。
今回、開催される「国際シンポジウム」は、平成29年（2017年）に日本で開催される「世界盆栽大会」のプレ国際大会として開催されます。コーディネーターは、西洋文化、日本文化両方に見識の高い、高階先生（文化勲章受章者）が決定されており、更に外国の方が二〜三人と国内盆栽界から二人が予定されております。
20年程前に当協会が主催した「高木盆栽美術館 記念シンポジウム」も大成功でしたが、今回も大変意義深い内容になると期待しており、当協会は積極的に協力し参画していきたくと考えております。

日時 平成28年2月11日（木祝）
午後1時〜5時（国風展会期中）
場所 よみうり大手町ホール
主催 さいたま市大宮盆栽美術館
参加者数 約500名予定
使用言語 日本語、英語、イタリア語（同時通訳）
口頭発表 基調講演及びパネルディスカッション
イベント 盆栽関連のイベントを各種開催
応募方法 ハガキ、FAX、WEB
参加決定 先着順 参加証送付
広報は、市報、盆栽美術館ホームページ、ポスター、チラシ、メディア（新聞、TV、雑誌、情報誌等）への掲載、インターネット中継にて。



ちやぼひば 鉢：和丸 吹田 勇雄（宮城県）

細幹で飄々とした樹形は高さを感じ、落ち枝には時代感と品格を感じます。この木を眺めていると、文人と言う修羅の中に本当の美しさが有る様な気がします。今や盆栽（Bonsai）は世界共通語。アジア諸国、ヨーロッパ地方の盆栽を数多く見っていますが、中でも中国の盆栽が極めて発展し目を見張るものが有り、私たち日本の盆栽作家も、更に心豊かに作品と向い合う必要が有ると考えております。



赤松（題：雲月清風） 鉢：飴釉南蛮丸 須藤 雨伯（栃木県）

この作品は、盆栽大家 高木禮二氏から受け継いだもので10年になります。盆栽は、鉢持込みにより、自然の力で人の作意を超越し天工により神聖なる盆栽となっていきます。盆栽の美は自然の客観的な表現だけでなく、更に「心に感悟可能」な主観的な表現を重んじます。盆栽の中に詩や絵の境地なき作品は靈魂なき作品となってしまいます。



五葉松

鉢：和楯円水盤

馬場 守一（群馬県）

曲がりの激しい松を石付きにし、自然景観を連想させるようにしました。



仏手柑（ぶっしゅかん）

鉢：海鼠輪花下方

菊岡 成泰（奈良県）

見事に大きな実。この不思議な形の果実は仏の手に似ていることから仏手柑といわれる所以である。お正月などに飾ると添景として人気があり、輪花の下方鉢とよく調和して楽しいものである。



黒松 鉢：和外縁六角 神成 由佳（東京都）

立ち上がりから右に吹き抜ける風は強く、長い年月を刻んだ黒松です。半懸崖の力強い樹形は理想的で、断崖上の厳しい景色を連想させる作品に仕上がっています。



五葉松 鉢：紫泥切足胴帯長方 養田 昂之（群馬県）

古色蒼然たるたおやかな樹姿、華麗にして瀟洒（しょうしゃ）な趣、個性的な落ち枝の線と絶妙な植え付け位置から生まれた余白との調和が、この作品の品格をより一層高めている。



花梨

鉢：白交趾楕円
小林 國雄
（東京都）

芸術作品に最後に求められるものは「品位」であります。この花梨は、根張り立上りに品格と風格が備わっています。

花梨

鉢：均窯太鼓丸
秋山 実
（山梨県）

この花梨を手がけるにあたり、素材の持つ自然な幹流れを重視し、さらに枝つきの良さも加わり、故意の枝作りをせずに自然な枝ほぐれを出すよう培養管理に努めました。



